

# 徳永直論——『最初の記憶』と

## 『八年制』を中心に——

今西紀代子

### 序

徳永直（明治三十二年—昭和三十三年）は、熊本県飽託郡花園村に貧しい作男の子として生まれた。その後、黒髮村に移り住み、幼少時代から数々の労働を体験した後、プロレタリア作家として文壇に登場し、『太陽のない街』（昭和四年）などを著わす。

本論では、彼の転向後の作品の中から、『最初の記憶』（昭和十三年）と『八年制』（昭和十二年）を取り上げた。『最初の記憶』では幼少時の労働体験を基にした彼の労働観が、『八年制』では親としての彼の教育観がにじみ出ており、共に社会に対する批判を投げかけている。

### 第一章 『最初の記憶』論（略）

### 第二章 『八年制』論

#### 第一節 作品の社会的背景

#### (一) 義務教育年限延長案について

作品のタイトル「八年制」とは、義務教育の「八年制」のことである。

義務教育年限は、明治四十年に「小学校令」改正により、それまでの四年から六年へと延長された。そして、その後、さらに二年間延長しようという案がたびたび検討されてきた。昭和十一年、二・二六事件の後、三月九日には広田弘毅内閣が成立し、文部大臣には実業家出身である平生文相ひらへが就任した。作品中のH文相とは、この平生文相を指すものと思われる。平生文相は、同年十一月六日に閣議に対して「義務教育八年延長案」を提出した。延長の主な理由は、戦時体制へ向けての労働力・軍事力の基礎固めのためである。しかし、財政難などの理由により反対意見が続出し、また、広田内閣自身が翌十二年一月二十三日に総辞職したため、法案は帝国議会に提出せずに廃案となった。その後、八年制案は、昭和十六年三月の「国民学校令」により実施されることになったが、戦争のために中断された。結局、長い間の懸案であった八年制は、実現されるこ

とはなかったのである。<sup>注1</sup>

## (二) 昭和初期の教育事情

昭和初期の教育事情について、宮坂広作氏の文章より抜粋させていただく。<sup>注2</sup>

- ① 当時のジャーナリズムが頻繁に取りあげた教育問題は、教育癡癡に、入学地獄、就職地獄と学校騒動であった。
- ② 教育癡癡の中には、大阪市や名古屋市の場合のように不正入学にかかわるものが多く、東京の学習帳売り込み事件も入試準備教育に由来するわけであり、昭和初年に教育に強い関心をもったのは、中学や高専に入學する子どもをもった中産階級の親たちであったといえよう。

③ 一九二七年（昭和二）には、高校の定員約五千人に対して五万人の志願者が殺到

④（昭和四年の大恐慌を背景にⅡ注・今西）大学卒業者の就職率は昭和五年で五八・一%、昭和八年で四〇・一%にすぎず、専門学校卒では二割そこそこ

⑤ 就職難なるがゆえに学校卒業の資格を得て、生存競争に打ち勝たなければならないというのが、中産階級の対処のしかたであった。

## (三) 「受験児童」について

作品中の「受験児童」の一例として、昭和十一年五月十四日の「九州新聞」の記事を紹介したい。要約すると、次のとおりである。

熊本県下の公私立中等学校入学志願者の身体状況調査の結果が判明したが、それによると、体格が劣るようにな

り、近視が増加しており、「試験地獄の為め体格は著しく低下」している。

都会のみならず、熊本県でも「試験地獄」の影響が出ていることから判断すると、この問題は全国的に広範囲にわたるものであったということが、うかがえる。

△注▽この当時、徳永は熊本在住ではなく、東京在住である（大正十一年に上京）。

## (四) 東北地方の「飢餓地獄」について

第五章の中ほどから、東北地方の寒村の小学校の「飢餓地獄」の様子が描写されている。その状況をさらに詳しく見てみたい。上笠一郎氏によれば、次のとおりである。<sup>注3</sup>

まず、日本の経済状態は、「大正七年（一九一八）一月にドイツの降伏で大戦が終りを告げると、連合国への物資供給で栄えていた日本経済は大きな打撃を受け、二年後の大正九年には早くも恐慌に見舞われ」、これがきっかけで「慢性的不況に陥り、昭和二年（一九二七）に至って金融恐慌におそれ、立ちなおる間もなく昭和四年の世界大恐慌の大瀡を受けることとなった」。

そして、東北地方では、それに追い討ちをかけるように、天候不順による凶作が昭和六年、九年、一〇年と重なり、農民たちの生活は極度に窮乏した。子どもたちの弁当は、「稗に麦一割を混ぜた飯」のようなものであったという。また、「欠食児童」の数（朝・昼・夕、いずれかを欠食）は、昭和九年度で東北六県を合わせて二〇万人にも達するという状態であった。

次に、徳永自身が実際に東北地方を訪れて記した文章があるので、紹介したい。『東北凶作地巡回記(青森県の部)<sup>4</sup>』(昭和十年)には、次のように記している。

こゝでは家の中に板の間すらがない。土間に穀殻をならべ、それに藁藁を敷いてあるのだ。仰ぐと杉皮の裂けめから、小雨がポツポツと落ちこんできて土間は黒く濡れてゐる。(中略)

しかし何といふ低い生活だらう。関西でも九州でもこんなひどい暮しの百姓は、私は見たことがない。

徳永は、「のちのプロレタリア作家中、屈指の逆境下で育った<sup>注5</sup>」と言われているが、その徳永でさえもこのように驚いているのだから、その貧窮のはなはだしさが想像できる。

## 第二節 内容・構成

作品は、六章より成る短編である。

まず、第一章では、主人公・鷲尾が「義務教育八年延長案」についての「日文相の大英断」という新聞記事を読んで、疑問を感じ、腹をたてる。その疑問とは、貧乏な保護者達は延長を歓迎するだろうか、というものである。この答に代わるものとして、第二章では、長男の進学問題から派生して、周囲の子供達とその家庭の経済状態を考える。そして、第三章以下では、さらに具体的に、子供達を取り巻くさまざまな問題を取り上げていく。

その問題とは、第三章で述べられる「試験地獄」(例・富裕な子供達と貧しい子供達との違い)であり、第四章に

おいての教育の「不自由さ」(例・長男の受持の退職)であり、第五章における「受験児童」の不健康な姿や東北地方の「飢餓地獄」(例・「欠食児童」の姿)であり、第六章における子供の失業問題である。

そして、最後に、第六章の末尾で再び第一章の新聞記事について考え、これらの問題を日文相や教育家達に向けて投げかけるという、首尾照応した構成となっている。

### 第三節 人物論

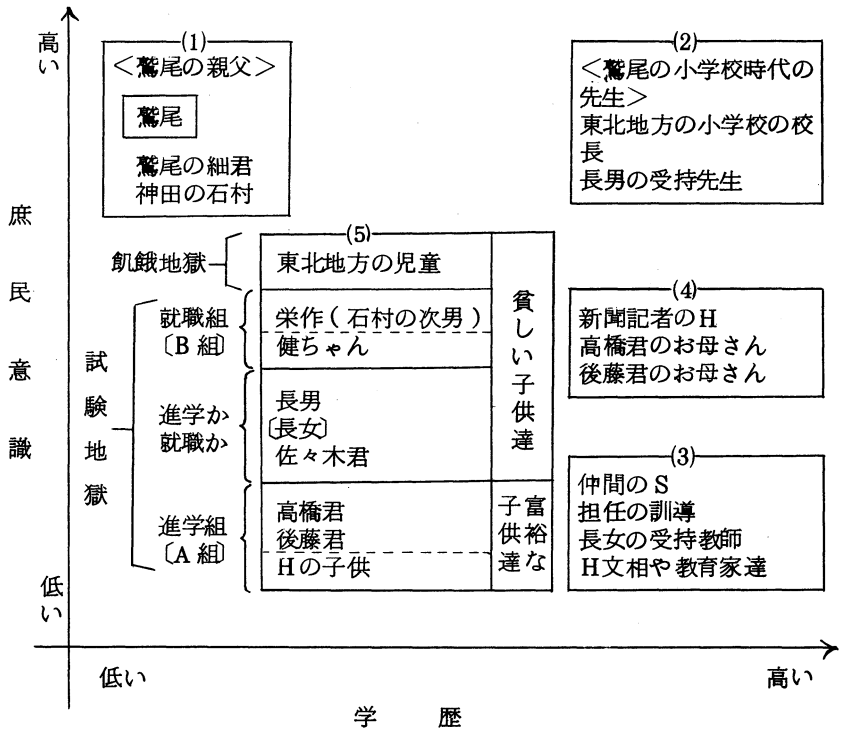
#### (一) 鷲尾一家と徳永一家との対比 (略)

#### (二) 登場人物について

では、登場人物を具体的に見てみたい。そこで、私は、試みに、人物の「学歴」と「庶民意識」(どれだけ貧しい庶民のことを理解しているか)という二項目を設定し、両項目の相関関係により、主な登場人物を五種類に分類してみた。その結果は、次の図表である。

『八年制』では、和田勉氏が指摘しているように、登場人物は、すべて主人公・鷲尾の視点から描かれている。登場人物のいろいろな言動を、鷲尾が好意的にあるいは批判的に眺めていくことによって、物語が進行する。そこで、人物論としては、鷲尾が先の(1)から(5)までの人物をどう見ているかというものを考えていきたい。そして、その過程で、鷲尾すなわち徳永の思想や、作品のテーマにも近づいていくことができると思われる。また、なぜ私が先の図表のように登場人物を分類したのかを示す根拠にもなるはずである。

図 表



- 注 1. < >は、一世代前の人物を示す。
2. (5)の中の点線は、「栄作」と「Hの子供」が「長男」達よりも学年が上であることを示す。また、〔 〕は、「長女」が「長男」達よりも学年が下であることを示す。
3. 同グループの中での上・下関係は、必ずしも明確ではない。作品中での描写の比重の度合いによって、私が主観的に判断した。
- たとえば、(1)では「鷲尾」の方が「神田の石村」よりも庶民意識が高いとは言い切れない。

A、鷲尾は(1)の人物をどう見ているか

(1)の庶民にとっては、「頭の算盤」をはじめくこと、つまり、生活できるかということが何よりも先決問題なのである。この点、(1)の人物達は皆、一致している。

B、鷲尾は(3)の人物をどう見ているか

順不同になるが、(2)をとばし、(1)と好対照を描く(3)から先に述べたい。

鷲尾は、「仲間のS」のことを、飯の心配のいらぬ「学校ブルジョア」であると思う。また、「担任の訓導」や「長女の受持」に対しては腹をたてるが、彼らに抗する勇氣はなく、「二人の子供に累が及びはしないかと」「卑屈におし黙ってしま」うのである。

C、鷲尾は(2)の人物をどう見ているか

(2)の人物は、(3)の人物と対照的であり、鷲尾にとって理想的な尊敬すべき人物となっている。しかしながら、彼らは、貧しい庶民にとっての八年制問題の現状に、相対することのできる人物とはなっていない。それは、「鷲尾の小学校時代の先生」は既に過去の時代の人であるし、「長男の受持」は(1)の人物や(5)の子供達に近づいたために、教壇を追われ、「東北の校長」は(飢餓の児童達の食糧供給のために)それどころではないからである。

D、鷲尾は(4)の人物をどう見ているか

(4)の人物は、進学を目指す子供達の父母である。インテリであり、ブルジョアでもある。つまり、(4)の父母は(1)の父母とは対照的なのである。が、(1)と対照的であるからと

言って、(3)の分類には入れなかった。それは、わが子のことをわが身より先に考えて東奔西走しているという点では、鷲尾達と何ら変わるところはないと思うからである。このことは鷲尾自身も感じており、新聞記者Hがわが子の受験について語るのを「内心憤慨しながら」も、「つい身につまされて熱心に聴きい」るのであり、Hに対して同情を寄せている。だから、私は、(4)の父母達を(2)と(3)との中間地带に置いてみたのである。

E、鷲尾は(5)の人物をどう見ているか

(5)の子供達は、「試験地獄」に追いまくらわれ、「飢餓地獄」に虐なまれている。彼らは、社会の一番の被害者と言ってもよいであろう。それで、先の図表では、(1)から(4)の大人達の中心に位置させてみたのである。

第四節 テーマ

結局、作品の第一のテーマは、貧しい庶民の立場からの教育行政批判である。つまり、義務教育年限を延長すれば、各家庭の経済的な負担が重くなるということである。そして、このことは教育問題だけに限ったことではなく、他の問題にも当てはまると思われる。すなわち、作品の第二のテーマは、教育の「不自由さ」、ひいては社会の「不自由さ」により、貧しい庶民が最も不利益を被らなければならないということである。

第五節 『八年制』評について

『八年制』の評価については、これまでプラス評とマイナス評がなされてきたが、私は、第三節の人物論を振り返

りながら、次のようにこの作品を評価したい。

登場人物の中で、鷲尾たち(1)の人物を理解してくれる者としては、(2)の人物が存在した。しかしながら、(2)の人物は、結局、鷲尾たちを助けてはくれない。それで、鷲尾たち(1)の人物は、思い悩むのである。

一方、(4)の父母達は、経済的な心配がないので、子供を上級学校へ上げることができる。しかし、その子供達は「試験地獄」の中で苦しんでいるので、(4)の人物もまた、鷲尾たちと同じように、社会の被害者であることに変わりはない。

このように、(1)・(2)・(4)・(5)の人物達は、社会のさまざまな問題の中で、どうすることもできずに社会の動きに流されているだけであった。そこで、そこに作家・徳永は、同じ立場にある者として目をつけ、そのような社会の実情を作品に託して訴えようと考えた。誰に訴えるかと言え、  
「しかしこういう事情について、当のH文相や教育家達は、一度でも思いを回らしたことがあるだろうか？」に示されるように、(3)の人物に対してであると思われる。しかし、(3)の人物に対してだけではとどまっていけないようである。すべての人物に対する警告であるとも受け取れる。

それは、(3)に属するかのような人物が(2)に属していたり(例・長男の受持)、(2)に属するかのような人物が(3)に属していたり(例・仲間のS)することから言えると思われる。つまり、インテリだから庶民のことがわからないとか、庶民に近づいているから庶民のことがわかっているとかがい

うことは、一概には言えないのである。ということとは、すべての人間は、心がけしだい庶民の実情を理解することができののだということになるであろう。徳永は、(3)の人物をむやみに非難するのではなく、(3)の人物を含めたすべての人物に対して警告を促し、さらに、今後のあり方をも提唱しているのである。

これらのことを考え合わせると、徳永は、『八年制』において、社会の影響を最も受けやすい、働く貧しい庶民の生活の実情を写すことによって、世の中のすべての階級の人々と共に社会の問題を考えていこうという方向を取った、ということが言えるのではないだろうか。当時、徳永は、時代の制約により、「初期の小説のように政治的な変革を口<sup>注7</sup>に」することはできなくなっていたが、こういう方向によって、間接的に変革を訴えたのである。作品の構成や人物造型には難点がある(各々の人物が対照的に描かれているということからわかるように、構成が比較的単純であり、人物がやや類型的である)にしろ、私は、徳永のこういう姿勢を高く評価したいと思う。

#### 第六節 『最初の記憶』との対比

『最初の記憶』は、徳永の幼少時の体験を述べている部分が主であり、個人的な自伝というような要素が強い。文章表現は、情感のあふれたものとなっている。

『八年制』は、社会のいろいろな階級の人々を、つまり群像を描いており、作者の視野が広がっている。文章表現については、『最初の記憶』と比べると飾らないものとな

っており、作者の生のことばで描かれている。「作品としてよりも記録として興味深い」という面がある。

以上のことから、文学作品としては『最初の記憶』がすぐれ、社会批判としては『八年制』がすぐれていると思われる。

### 結び

『最初の記憶』と『八年制』の両作品に共通するものは何か。まとめてみると、次のとおりである。

一、作品中に自分の体験を色濃く反映させている。

二、自分の身近な人物を主に登場させている。

三、文体は平易で、描写は写実的である。

四、働く貧しい庶民の立場から社会批判を行っている。

徳永は、これらの方法によって、日本プロレタリア作家同盟の解散（昭和九年）後、新しい境地を見いだしていたのである。ただし、新しい境地とは言っても、貧しい者、弱い者の立場に立つということは、変わることなく貫かれていると思われる。

注1 『日本近代教育史事典』（平凡社、昭46・12。）などを参考にした。

注2 『教育学全集3』小学館、昭43・2。

注3 『日本子どもの歴史6 激動期の子ども』第一法規出版、昭52・7。

注4 「文学評論」二巻三号、昭10・3。

注5 紅野敏郎「作家と作品」（『日本近代文学全集43』

集英社、昭46・9。）

注6 「熊本の文学30 徳永直4」（「熊本日日新聞」、昭58・2・23、夕刊。）

注7 首藤基澄「徳永直の転向小説―弱者の視座の意味

―」（「方位」第五号、熊本近代文学研究会、昭57・11。）

注8 麻四郎「小説採点簿」（「文芸」五巻七号、昭12・7。）

△原典▽『徳永直短篇選集』徳永直文学碑をつくる会発行昭51・11。なお、「熊本・徳永直の会」が徳永に関する研究を行っている。事務局は熊本大学教育学部中村研究室。（三十二回生）